ＪＲ東労組 本部ＯＢ会 ニュース

東日本旅客鉄道労働組合
東京都渋谷区代々木２丁目２番６号
ＪＲ新宿ビル13Ｆ　〒151-8512
Tel. 03－3375-5740（代）
発行責任者　大 熊 勝 明

№ 165　2011 年 12 月　発行

「エルダー社員制度」の改善を申し入れ、前進をかちとる！

エルダー代表も説明員として参加

3・11東日本大震災で延期になっていた「申20号」のエルダー組合員の待遇改善を求める交渉が、10月24日本社で行われ、首都圏で勤務しているエルダー組合員の4名も、交渉説明員として参加しました。

交渉は、本部が「申20号」として申し入れていた4項目について行われ、今までは「違う会社のこと」と頑なに斥けてきたＪＲ本社も「六五歳まで再雇用している本体が責任を持ち、必要に応じて努力・指導していく」と回答し、一定の前進をかちとることが出来ました。

組合が申し入れていた要求と、会社の回答は次の通りです。

《組合》劣悪な作業条件を緩和するために、年間休日は一一四日とすべきだ。

《会社》一一四日になれば良いがグループ会社の体力もある。（本体並の年間休日が望ましいという会社の認識を確認した）

《組合》経験のない職種に就くときは、本体で事前に教育すべきだ。

《会社》全くやったことのない仕事に対して教育が必要な事は理解できる。必要な場合は教育を行なう。（系統を超える場合、必要により事前教育を行なうことを確認した）

《組合》出向先の正しい情報を事前に説明するべきだ。

《会社》正しい情報を提供するよう支社や現場長に対して指導していく。（正しい情報提供のために、努力・指導していくことを確認した）

《組合》事情により出向先を途中で辞める人に対して、もう一度出向先を斡旋すべきだ。

《会社》ＪＲ本体で再雇用しているので、六五歳までは本体が責任を持つ。事情があってその出向先を辞める場合には、まずは出向先の会社に相談してほしい。（六五歳まで再雇用している本体が責任を持つことを確認した）

「エルダー社員制度」が発足して三年半が経ちますが、やっと念願のエルダー組合員の待遇改善を求める交渉が実現できました。

この間、現役時代と違う環境と労働条件下にあって、誰にも相談できず、様々な理由によって出向途中で辞めざるを得なかった人が大勢いました。また我慢に我慢を重ねて、歯を食い縛って今なお働き続けている人もいます。

エルダー社員制度は、年金の支給開始年齢の引き上げに起因した制度であり、国が企業に雇用保障を求めたもので、企業に責任があります。

本部ＯＢ会は、今回の交渉がそのような人達にとって一筋の光明になればと思います。まだまだ具体的には何も解決していませんが、今まで「門前払い」だった会社に対して、聞く耳を持たせたという意味で大きな意義があったと思います。これからも中央本部としっかり連携をとり、更なる待遇改善に向けて取り組みを強化していきます。

ＯＢ声の広場

生涯労働者の原点

◇ 昭和45年10月に電車運転士科を卒業、南武線の中原電車区に赴任しました。当時の中原電車区は、国労中心の日共色の強い職場で動労の鉄輪旗の旗はなく、新鶴見機関区が近いこともあり、毎月組合費を新鶴見支部に納入していました。この行動に対して国労分会は一人ひとりに担当を決め、組織切り崩しの攻撃を仕掛けてきました。昭和45年5月、一人の脱落者もなく中原電車区支部結成にこぎつけました。支部を結成した頃は、マル生攻撃の最盛期で組合事務所もなく、6人部屋二段ベットの乗務員用寝室で連日のように執行委員会を開催しました。

◇ マル生粉砕の遵法闘争では動労組合員が少なかったこともあり、毎日のように助役がストップウォッチを持参して添乗、ノッチやブレーキの時期にクレームをつけられましたが、毅然と闘い抜きました。特にラッシュ帯での川崎駅は、お客さんがホームにあふれ、ＡＴＳが鳴動するとホームの真ん中で非常ブレーキを掛け一旦停止してから停止位置まで運転するので、旧車のためエアーが込まるまでの約30秒の時間がすごく長く感じたことを想い出します。

◇ 組織を信じ仲間を信頼して、マル生攻撃を粉砕するために、皆が同じ思いで闘っていたから、当局の攻撃に屈することなく闘えたと思います。闘いの過程で、当局は組合役員の中にスパイを送り込み、この事実が明らかにされると新宿駅貨物の助役として転勤させましたが、この事で当局は組織を破壊するためにあらゆる手段を使うことを学びました。

◇ その後、昭和48年4月の武蔵野線開業に伴い、東所沢電車区に組織転勤して、スト権奪還闘争、目黒選挙、国鉄改革等を連続して闘い、退職以降も存在感のあるＯＢ会をつくり、八王子地本「田畑運動」の実行副委員長として若手組合員の育成を目標に頑張っています。これも中原電車区での2年半で学んだことが原点になっています。

◇ 現職を含め41年間、様々の役職を経験することを通して、多くの仲間を知り、様々の事を学ばせて頂きました。「組織が何をしてくれるのか」ではなく、「自分として組織に何ができるのか」の思いで、「第2のマル生」粉砕のため、経験をもとに現役の仲間と連帯して奮闘していきます。

八王子地本・立川支部ＯＢ会（Ｔ・Ａ

新潟地本ＯＢ会／「最高裁要請行動」を展開！

去る11月7日、新潟地本・渡部ＯＢ会長を先頭に15名の会員（新潟地本から稲垣委員長も随行）が「ＪＲ浦和電車区事件」の口頭弁論を開かせ逆転無罪判決を求める要請行動を行いました。

最高裁で美世志会の山田　知さんと合流し、守衛の案内で書記官補佐が待ち受ける部屋に通されました。

要請行動は冒頭、渡部会長から「一審・二審の判決を破棄して国民が納得できる無罪判決を」という主旨の要請文が読み上げられました。その後、全参加者から「日常の組合活動が犯罪にされることは団結権の侵害。国鉄改革を否定する吉田君を質す取り組みは強要罪に当たらない。シナリオに沿った検察・権力の暴走で『事件』は意図的にデッチ上げられたもの。口頭弁論を直ちに開催して公正・公平な裁判を」と口々に訴えました。

書記官補佐からは「一八〇回目の要請行動。皆さんの声は担当書記官を通じ全て裁判官に伝えます」とのコメントがありました。新潟地本は、今回の行動でさらに弾みをつけ、ＪＲ東労組の組織を守り抜く取り組みを強化していくことを確認し合いました。

大宮地本ＯＢ会と念願の交流会

その後、最高裁要請行動を終えた新潟地本ＯＢ会と大宮地本ＯＢ会は浦電事件発生以来の長年の懸案だった交流会を大宮地本会議室で開催しました。

大宮から「何かあったのではないか？」と当時一部で言われたが、当たり前の組合運動であり浦電事件はデッチ上げ弾圧だ。美世志会7名は無実・無罪で、この達磨のように真っ白である」と報告がありました。

新潟からは要請行動の報告と、さらに「一時期、我々も権力の手先・組織破壊者と言われたが、それは事実無根。組織破壊の首謀者・松崎嘉明の支持者450名は去って行ったが、その後われわれは組織を再建してきた」と報告があり、両地本のＯＢ会長が固い握手をしました。

約一時間の短い交流会でしたが終始和やかな雰囲気の中で行われ、最高裁での逆転無罪を勝ち取るまで奮闘することを誓い合いました。

原ノ町・いわき地区の被災者に善意を届ける！

本部ＯＢ会と水戸地本ＯＢ会による激励行動／報告

避難先が転々と変わり、被災者の追跡に苦労

去る一〇月一八～一九日、本部ＯＢ会と水戸地本ＯＢ会が合同で、いわき・原ノ町地区の被災者を見舞う激励行動を取り組みました。

今回の激励行動には、本部ＯＢ会・大熊会長、水戸地本ＯＢ会の鈴木会長・狩谷副会長・江幡事務局長の四名で被災現地に向かいました。

初日に訪ねた原ノ町地区は、常磐線が津波で寸断され、さらに原発の事故で、二〇キロ圏内に立ち入りが禁止されているため、自動車で水戸から迂回する形で向かいました。

被災者激励／いわき支部にて

原ノ町支部には、避難先から出向いて下さった畠中正雄さんを始め、支部委員長、ＯＢ会長、会員が多数参加され、お見舞い金を手渡すことができました。

津波と原発事故で復旧の見通しが立たない中で、原ノ町地区の現役組合員が、会社からの転勤・異動発令で不在となっているため原ノ町支部をＯＢ会がしっかりと守り抜いていました。

二日目はいわき地区に移動し、被災された松本芳栄さんと支部ＯＢ会の皆さんに集まっていただき、お見舞い金を手渡しました。

いわき地区は福島第一原発に近いことから避難所を何度も変わり、今の仮設住宅に辿り着きホッとしている心境が語られ、一日も早く故郷に帰りたい思いと放射線被曝を恐れる気持が交錯する会員の悩みに役員が相談相手になっている苦労話なども語ってくれました。

本部ＯＢ会が取り組んできた「義援金」を手渡す形でのお見舞い金・激励行動は、仙台・千葉・盛岡と一通り実施され、今回の水戸地本ＯＢ会のお見舞い行動で最後になりました。

原ノ町・いわき地区を抱える水戸地本ＯＢ会は、原発事故で避難先が転々と変わる会員も沢山おり、会員の安否と避難先の追跡に苦労しています。原発から二〇キロ圏内に居住していた会員は二〇名を超えており、今後の追跡活動の中で所在が判明した人には、地本ＯＢ会から「お見舞い金」を手渡してくれるよう要請して今回の激励行動を終えました。

『我らの声』原稿募集

締切り日せまる！

● 今回の『我らの声』の原稿募集は、例年より１ヶ月早い１月 31 日が原稿締め切り日ですので、ご注意下さい。

☆ 今年は、3･11 東日本大震災があり、福島第一原発が事故を引き起こし、放射能に逃げ惑い、地域社会が引き裂かれました。

☆ 世界の資本主義は米国もヨーロッパ諸国、そして日本もおしなべて行き詰まり、財政赤字に苦しみ、そのしわ寄せが増税・各種料金の負担増、年金支給額の切下げ等で、私たち高齢者の頭上にのしかかろうとしています。

☆ 今こそ『我らの声』に民衆の怒りや叫びを遠慮せずに発信して下さい。

《募集原稿》

- ❑ テーマは自由です。
- ❑ 1600 字以内にまとめ、原稿に相応しい写真があれば、添付して送って下さい。

＜原稿の送付先＞

- ◆ 各地本のＯＢ担当者又はＯＢ会役員まで。

私のエルダー職場紹介します

一人はみんなのために　みんなは一人のために

八王子地本・三鷹電車センター分会ＯＢ　竹之下　透

私のエルダー社員としての出向先職場は、東日本運輸サービス㈱三鷹事業所で、ＪＲ社員時代から今年十月で一年半を迎えました。現在7名（ＯＢ2名・エルダー5名）の仲間と共に構内作業に従事しています。

出向先の東日本運輸サービス㈱は、車両清掃及び外注化による構内運転作業等の事業が経営の柱となっています。勤務先の三鷹事業所は三鷹車両センター構内にあります。

この三鷹車両センターは、旧三鷹電車区から二〇〇七年十一月に乗務員基地の再編により車両メンテナンスのみの職場となりました。三鷹電車区はご存知のように一九四九年、三大フレームアップの一つである三鷹事件が引き起こされた地であります。

一九九六年には第二の三鷹事件とも言われた防護無線機の盗難事件が何者かにより仕組まれ、権力が土足で踏み込んできました。全国の仲間に励まされ、一人の逮捕者も出さずに終結させることができました。その翌年には多くの死傷者を出したわが組合員による大月事故が発生し、従来のＡＴＳの取り扱いが大きな議論になりました。

このような事件・事故を通じて徹底的に論議した結果、多くの若手活動家が育ち、現在は基地構想により新しく出来たそれぞれの分会で重要な役割を担っています。

さて、構内作業は一徹二日勤、毎日三名の仲間で日々業務をこなしています。月に五～六日は清掃業務も発生し、慣れない仕事に苦労しながらも頑張っているところであります。

私事ではありますが、昨年四月に出向で現在の会社に入り、清掃の見習い中に手首を怪我し、治療は難しいだろうという診断が下されました。私が落ち込んでいる時に六名の仲間が親身になって「清掃は俺たちが引き受けるから運転だけに従事すれば良い……」と言ってくれました。あの時ほど仲間の有難さを痛感したことはありませんでした。

国鉄からＪＲへと苦しい闘いをやり遂げた仲間、時には笑い、涙したわが同志、まさに「一人はみんなのために、みんなは一人のために」、この言葉を、これから組織を創っていくであろう若者に贈りたいと思います。